

北房地域振興計画

観光地域づくりに向けて

～とにかくおいでよ、ずっといたいまち北房～

令和3年3月

真庭市北房振興局

目次

計画の目的

北房地域振興計画策定の目的

第1章 北房地域の概要

- (1) 自然及び地理的条件
- (2) 歴史的条件
- (3) 産業的条件

第2章 市の関連計画や取組

- (1) 第2次真庭市総合計画
- (2) 真庭市観光戦略及びアクションプラン

第3章 北房地域の現状と課題

- (1) 人口動態について
- (2) 観光動態について

第4章 北房地域の目指すべき方向性

- (1) 策定委員会の設置
- (2) 主要テーマ
- (3) 北房地域振興計画の体系図

第5章 具体的な取組

- (1) 全国に発信する「日本一のホタルの里づくり」
- (2) ロマンと郷愁の里「西の明日香村づくり」
- (3) 子どもも大人も学び続ける「学びの里づくり」
- (4) 誰もが住み続けたい「人を受け入れる里づくり」

第6章 地域間の連携と交流

- (1) 個々が連動し「地域・人を動かすまちづくり」
- (2) 北房地域振興計画を動かす推進体制

計画の目的

旧北房町は、平成 17 年 3 月の合併によって真庭市となり、「北房地域」として市を形成する一つのエリアとなった。真庭市では、行政や後に設立される真庭観光局（真庭観光連盟）などにより、地域の個性を生かしながら横の連携を図る取組が行われ、市民が市内各地の魅力を知るようになったほか、相互に地域づくりの取組を学びあう交流も始まり、旧町村の垣根を越えた活動が生まれるようになった。また、バイオマスの利活用や生ゴミの資源化、なりわい塾など里山の資源や人を生かす事業は全国から注目され、持続可能な地域経済・社会を実現するためのモデルとなっている。平成 30 年に真庭市が『SDGs 未来都市』に選定され、さらに全国 10 の『自治体 SDGs モデル事業』の一つに選ばれたのも、こうした取組によるところが大きい。

一方、各地域には振興局が置かれ、それぞれの特色を生かした事業が行われており、北房地域においても住民主体の取組や新たな団体が生まれるなどしている。しかしながら、官民の連携や個々の取組がつながりを欠いている一面もあり、地域全体の動きに発展していないのは課題である。北房の資源や特色、これまでの取組を整理し、住民と行政がともに目指す将来像を描いていく必要がある。

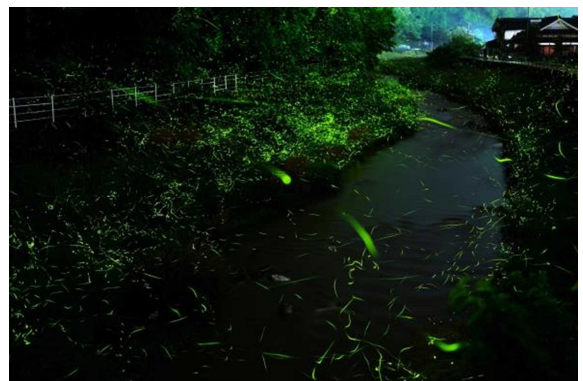
この「北房地域振興計画」はその将来像であり、概ね 10 年先の将来に向けて実施すべき取組と活動についてまとめたものである。

第 1 章 北房地域の概要

(1) 自然及び地理的条件

北房地域は、真庭市の最南端に位置する。市を南北に流れる旭川の支流のひとつ備中川上流域にあり、岡山県北部では比較的温暖な気候の地域である。県北西部のカルスト台地「阿哲台（あてつだい）」に接していることから、石灰岩が露出する地形や鍾乳洞が点在し、ミネラル分豊富な中硬水が湧出・流出するのも特徴である。こうした自然条件に育まれて、北房全域には至るところにホタルが生息しており、北房のシンボリックな存在となっている。また、岡山県の中央部にある吉備高原の北側にあるため、「奥吉備」と称されることも多い。

交通面では、国道 313 号が東西に横断し、中国自動車道と岡山自動車道が結節する交通の要衝で、北房インターチェンジは真庭市の南の玄関口となっている。岡山市や倉敷市などの県南都市部からは高速道路で約 1 時間のアクセス圏内にあり、岡山自動車道の 4 車線化によって交通の利便性はますます高まっている。また、中国自動車道には北房皆部バス停があり、京阪神からのアクセスもよい。



(2) 歴史的条件

歴史的な背景は特徴的で、古くは古墳時代からの史跡が多く残っている。国指定史跡の大谷・定古墳群、北房地域最古の荒木山古墳群をはじめ、200基以上の古墳が確認されており、発掘調査された古墳からは歴史的価値の高い副葬品も数多く出土している。こうした出土品や古墳の様式、時代背景などから、中央政権の有力者が関係していたとされている。

7世紀後半に吉備国が三分されてからは備中国（びつちゅうのくに）となった。中世には、佐井田城や高鶴部城といった山城も築かれ、備中を舞台とした戦乱の要地となり、その遺構は現在も残っている。江戸時代には、備中松山藩の藩主が伊勢亀山藩主となった際に亀山藩の飛び領地となった歴史もあり、その時代に行われていた市に由来する「ぶり市」は、300年以上たった現在でも、年中行事として続けられている。



(3) 産業的条件

北房地域の産業の基盤は主に農業であり、古くは稲作が中心であった。前述した伊勢亀山藩は養蚕や葉煙草栽培を奨励し、特に葉煙草は「中津井刻（きざみ）」として、大阪や広島方面でも販売されていたという。人の往来が盛んであった中津井や砦部には牛市も立てられ、こうした物産の流通の場となり、現在も残る町並みが形成されていった。昭和後期になると葉煙草栽培は衰退し、これに代わったのがぶどう栽培である。寒暖差のある気候が栽培に適し、ニューピオーネやシャインマスカットなど、品質のよいぶどうが栽培されている。また、昭和55年に北房ダムが完成したことで安定した灌漑用水の供給が可能になり、稲作だけでなくトマトやキュウリなど、多品種の野菜の栽培も行われている。



第2章 市の関連計画や取組

(1) 第2次真庭市総合計画

真庭市では、市の最上位計画として平成27年に「第2次真庭市総合計画」を策定（令和2年12月改訂）している。同計画では「誇り」「許容性」「持続可能性」「安全安心」「教育」を基本理念とし、市民一人ひとりの多彩で豊かな生活を重視した「真庭ライフスタイル」の提案を行っている。また地域・観光振興に関して、「多彩で循環性のある持続可能なまち」を目指し、「多彩な地域の個性を育てる」「地域資源を活かした「回る経済」を確立する」ことを示している。

第2次真庭市総合計画における地域・観光振興に関する記載

第5節 多彩で循環性のある持続可能なまち

第1項 多彩な地域の個性を育てる

【施策の方向性と目標】

- 真庭市の自然、歴史、文化などを見つめ直し、維持保全し、伝承し、地域資源を活かした魅力的なライフスタイルを提案していきます。
- 「ひと」と「ひと」、地域と地域の交流により、互いの魅力を認め合うことで、各地域にあった魅力的なライフスタイルが市民の手でつくられていくよう支援します。
- 地域資源を見つめ直し、「掘り起こし（発掘・創出）」や「磨き」「連携（組み合わせ）」により、地域の活性化を進めます。
- 「ひと」と「市役所」が、交流や連携を通じ真庭市への誇りや愛情を持ち、一体となってさまざまなメディアを活用した情報発信に取り組みます。
- 自然環境や里山風景を将来に継承していくため、里山の担い手を育成していきます。

第2項 地域資源を活かした「回る経済」を確立する

【施策の方向性と目標】

- 農林畜産物や景観、文化、伝統などの地域資源を組み合わせた新しい観光の取り組みを支援し、「回る経済」の中の産業として強化します。

（出所）真庭市「第2次真庭市総合計画」

(2) 真庭市観光戦略及びアクションプラン

真庭市及び一般社団法人真庭観光連盟（現：一般社団法人真庭観光局）では、市の観光誘客数が低下傾向にあり、基幹産業の一つである観光産業のより一層の活性化が必要であることを踏まえ、平成29年に「真庭市観光戦略」を策定している。同計画では「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりを観光振興の基盤に据え、「市民が誇りに思える観光」「回る経済の仕組みの構築」「地域間の相乗効果」等を方向性として示している。

真庭市観光戦略の概要（抜粋）

●真庭市のあるべき姿、ありたい姿

- ① 自己実現を果たし、社会で活躍する生き生きとした「人」がいること。
- ② 豊かな「自然」と人とが共存する循環型の暮らしがあること。
- ③ 市民が地域に「誇り」をもっていること。
- ④ 顔の見える人と人との関係があり「風通しの良い」地域社会であること。
- ⑤ お互いの関係により、地域社会が「安心・安全」であること。

●真庭市の地域課題を解決する「観光地域づくり」への期待

- ① 観光・交流により市民の活躍の場ができ、住民同士のコミュニケーションも活発になる。
- ② 地域の魅力を市民が再認識し、若者流出抑制が期待できる。
- ③ 「回る経済」の仕組みを構築する。
- ④ 旅行者への演出の取組を通して、住環境や景観が維持・改善される。
- ⑤ 広範囲に及ぶ取組を通して相乗効果が生まれる。

●独自の価値を活かした「観光地域づくり」を進めるための具体的計画

- ① 地域の魅力（独自の価値）の再認識とブラッシュアップ
- ② 地域の魅力（独自の価値）の発信
- ③ 旅行者（お客様）を滞在・回遊させるための工夫
- ④ 「観光」を産業にする工夫
- ⑤ 受入環境整備

（出所）真庭市及び一般社団法人真庭観光連盟「真庭市観光戦略」

北房地域振興計画は、真庭市総合計画や真庭市観光戦略の方針に合致し、北房地域の観光を含めた地域づくりの方向性を示すものとして策定する。

第3章 北房地域の現状と課題

(1) 人口動態について ～少子高齢化が顕著、小学校を維持するためには～

北房地域の人口は、合併当初の平成17年4月は6,365人であったが、令和2年4月には4,982人となっており、15年で約1,400人も減少している。これは、現在の水田地区全体の人数を超える数字である。また、高齢化率（人口のうち65歳以上が占める割合）は32.95%から42.07%に上がっている。

次に、年齢層別に見てみると、年少人口（15歳未満の人口）は表2のとおり明らかな減少傾向にある。いわゆる少子高齢化であるが、特に子どもの人数が少なくなっているのは深刻な問題で、このままでは北房小学校（平成30年に4小学校を統合して誕生）を維持することが困難な状況になりかねない。北房小学校や北房中学校を維持するためにも、若者が住み続けたい地域、移住希望者が住みたいと思うような魅力ある地域づくりが必要である。

（人口は住民基本台帳の4月1日を基準日として比較）

表1 北房地域の人口推移(地区別)

地区	H17	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	増減	減少率
中津井	1,397	1,209	1,191	1,172	1,144	1,113	1,093	1,071	-326	-23.3
皆部	1,362	1,150	1,116	1,105	1,085	1,059	1,043	1,013	-349	-25.6
阿口	300	231	220	217	212	202	189	179	-121	-40.3
上水田	1,708	1,586	1,560	1,536	1,509	1,478	1,452	1,451	-257	-15.0
水田	1,598	1,434	1,421	1,390	1,380	1,349	1,312	1,268	-330	-20.7
北房全体	6,365	5,610	5,508	5,420	5,330	5,201	5,089	4,982	-1,383	-21.7

※増減、減少率はH17とR2の比較

表2 北房地域の人口推移(年層別)

年層	H17	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	増減	減少率
15歳未満	756	597	580	567	551	538	517	499	-257	-34.0
15歳以上65歳未満	3,512	3,016	2,902	2,777	2,663	2,550	2,468	2,387	-1,125	-32.0
65歳以上	2,097	1,997	2,026	2,076	2,116	2,113	2,104	2,096	-1	0.0
北房全体	6,365	5,610	5,508	5,420	5,330	5,201	5,089	4,982	-1,383	-21.7
高齢化率(%)	32.95	35.6	36.78	38.3	39.7	40.63	41.34	42.07		

(2) 観光動態について ～繁忙期と閑散期のギャップ、入込数は減少傾向か～

北房地域の観光を支える観光資源として、ホテルやコスモス、ぶり市などのイベント、古墳などの史跡があげられる。魅力ある素材に事欠かない一方、その多くは季節や時間が限られる瞬間的なもので、年間を通じた誘客につながりにくい状況にある。そのため、繁忙期と閑散期のギャップ

に非常に苦慮しているのが現状である。大型観光地ではないため、時代による旅行形態の変化などに左右されることは少ないが、それでも観光動態を見ると厳しい状況にある。以下は、市が発表する観光動態調査の北房地域分の数値である。(市管理観光施設とイベント入込人数の集計)

平成 28 年に新たな指標(ホテル観賞月間 20,000 人)を加えたことやイベントの中止があったため、数値の傾向がつかみにくいが、それらを修正してみると以下の表のようになる。

年	公表数値(人)		修正数値(人)	備考
平成 26 年	88,251	…	108,251	ホテル観賞月間の 20,000 人をプラス
平成 27 年	102,163	…	122,163	ホテル観賞月間の 20,000 人をプラス
平成 28 年	121,459	…	121,459	
平成 29 年	117,039	…	117,039	
平成 30 年	114,877	…	114,877	
令和元年	85,059	…	98,059	中止となったコスモスまつりの 13,000 人をプラス

これを見ると、平成 27 年をピークに減少を続けている。真庭市全体でみても減少傾向にあることから、全体の動きといえなくもないが、施設の老朽化やイベントのマンネリ化、情報発信の不足といった課題があるように思われる。しかしながら、酒蔵の蔵開き、鍾乳洞でのイベント、農泊推進、北房まちの駅やカフェのオープンといった、この指標に表れない新たな動きも生まれているため、北房を訪れる人が増える環境が整ってきているのも現状である。

こうした中、令和 2 年に新型コロナウイルスが世界中で感染拡大し、状況は一変した。国内外を問わず旅行やレジャーが自粛されるようになり、北房でも飲食や宿泊サービスを提供する事業者などは大きな打撃を受けた。さらに、令和元年に砦部商店街にゲストハウスがオープンしてからは、外国人旅行者の往来も増えてきており、インバウンドに活路を見いだそうとしていた中の出来事であっただけに、この事態は相当な痛手となった。

しかしながら、この状況は地方へ目を向けるきっかけにもなり、特に豊かな自然の中で過ごす時間や暮らしがプラスの面で見直されるようにもなっている。実際、コロナ禍にあった令和 2 年の 6 月は、例年に劣らず大勢のホテル観賞客が訪れ、ほたる公園には県外ナンバーの車がたくさん止まっていた。今後の状況の変化を予測するのは難しいが、状況はいつでも変わりうるということ想定し、逆風を追い風に変える発想を常に持っておかなければならない。

第4章 北房地域の目指すべき方向性

(1) 策定委員会の設置

北房地域振興計画を策定するにあたって、住民参画によりあらゆる意見、視点をもって計画づくりを行うため、「北房地域振興計画策定委員会」を令和2年8月に設置した。策定委員会では、住民意識や地域課題をつかむためにアンケートを実施。一般アンケート（高校生以上の北房地域在住者を無作為で1,000人抽出）と中学生アンケートを行い、北房の特色やこれからのまちづくりへの展望などについて質問をした。

アンケートの回答率は45.3%

策定委員会では、北房地域振興計画に住民の意見を反映させるためアンケート調査を実施した。このアンケート調査は、無作為に抽出した高校生以上の1,000人を対象とした一般アンケートと北房中学校を対象とした中学生アンケートを行い、北房の特色やこれからのまちづくりへの展望などについて尋ねた。回答者は453人で、回答率は45.3%という結果であった。

一般アンケートの年代別の回答率を見ると、1位が70歳代で54.1%、2位が60歳代で51.9%、3位が40～50代で43.1%、以下、80歳代、10歳代の順で、いちばん低かったのが20～30歳代の33.5%であった。

また、男女別に見ると、男性が47.0%、女性が43.7%であった。

(2) 主要テーマ

策定委員会では、北房の特色や強みなどの意見抽出を行い、振興計画の柱となる主要テーマの設定を行った。グループワークで北房の将来像をイメージし、そこに向かうための施策を絞り込んでいった。

そこでまず挙がったのは「ホテル」と「古墳」である。北房の代表的な地域資源であり、これまで行われてきた取組、これからの動向、他からも認知されていることなどから、北房の魅力を高め人を呼び込むための主要な取組として設定された。また、北房の人たちがホテルや古墳がある地域に誇りを持ち、素晴らしいまちであることを積極的に発信していくためには、もっと地域を知るための「学び」の環境が必要であることから、主要テーマと設定された。

一方、今後北房というまちをどのように維持し発展させていくかという議論の中で、人口や移住・定住に対する取組の必要性も大きくなっていった。北房へ移住したくても住む場所や仕事、情報がないといった問題提起もあり、そのための「人を受け入れる」仕組みが必要であるという視点から、これも主要テーマのひとつとされた。結果、以下の4つが主要テーマとして設定された。

全国に発信する「**日本一のホテルの里づくり**」

ロマンと郷愁の里「**西の明日香村づくり**」

子どもも大人も学び続ける「**学びの里づくり**」

誰もが住み続けたい「**人を受け入れる里づくり**」

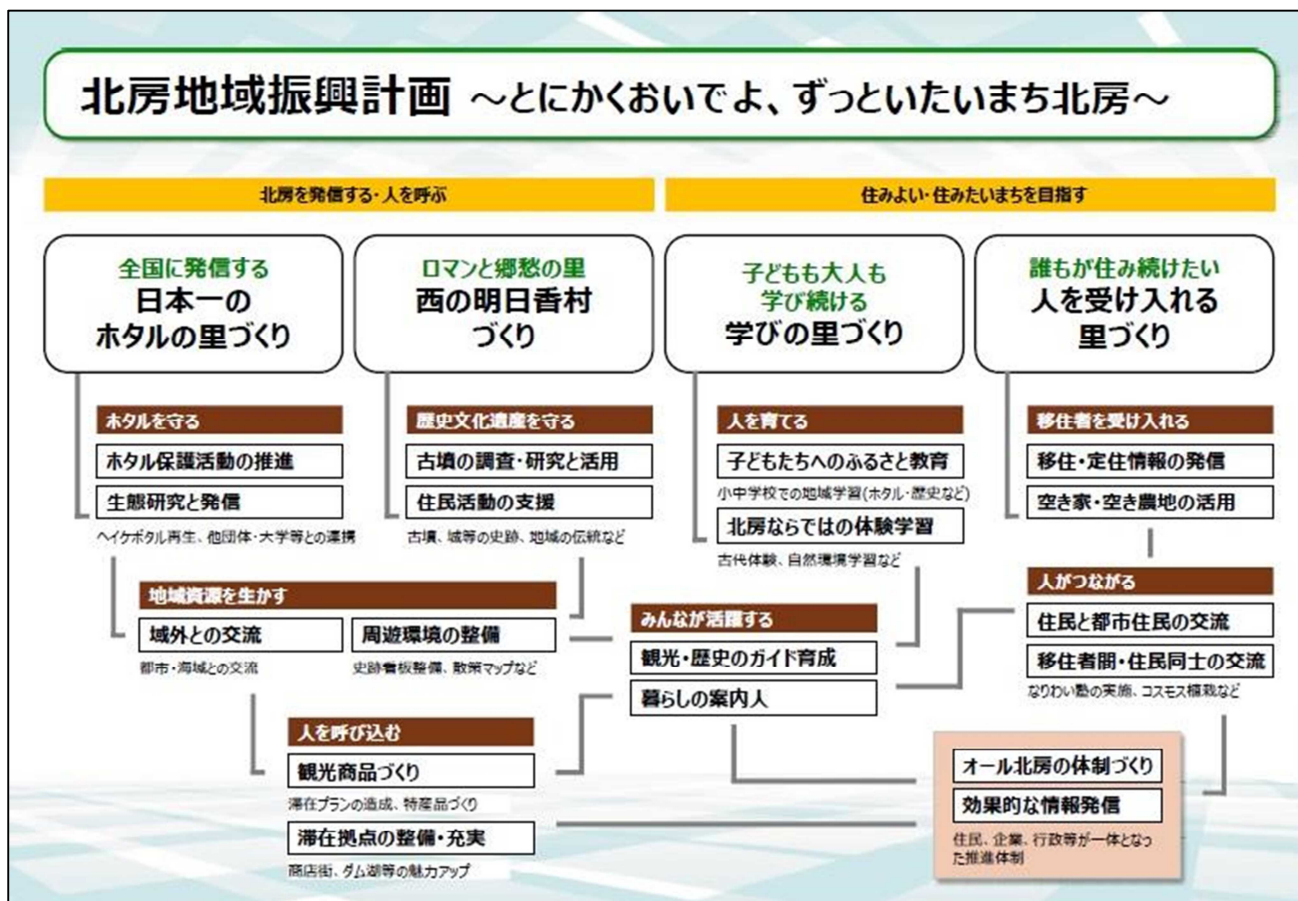
そして、これらのまちづくりを推進していくための共通のイメージ、目標を表すことばとして「**とにかくおいでよ、ずっといたいまち北房**」も決定した。これは、北房がこの先どのようなまちになるかという将来像であり、北房地域振興計画のキャッチフレーズになるものである。



北房地域振興計画策定委員会の様子

(3) 北房地域振興計画の体系図

こうして導き出されたキャッチフレーズと主要テーマ、そして策定委員会の意見交換やグループワークの中で出たアイデアなどを体系図としてまとめたものが以下である。この体系図は北房地域の将来を描くための設計図であり、地域の共通の目標となるものである。



第5章 具体的な取組

(1) 全国に発信する「日本一のホタルの里づくり」

ホタルは北房を代表する地域資源

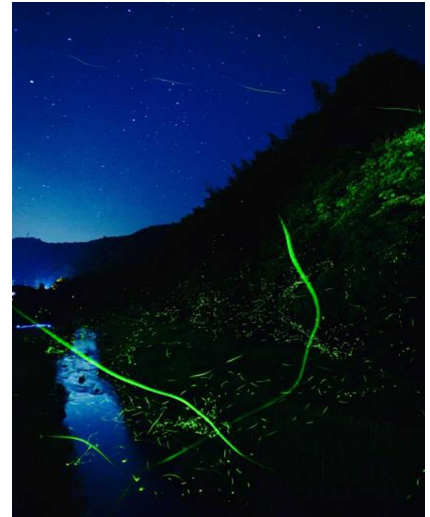
北房は全国有数のホタルの生息地である。「北房の自慢」を尋ねたアンケートでもホタルが上位（一般1位、中学生3位）であったように、北房の代表的な地域資源として認識されている。ゲンジボタルは備中川のほぼ全域に生息しており、北房の人々にとってホタルがいる風景は当たり前なものになっている。毎年6月になれば、ホタルが舞う優雅な田園風景を求めて市外・県外からも大勢の人が北房を訪れ、北房がもっともにぎわうシーズンとなる。これらは、長年にわたって住民による保護活動・啓発活動が行われてきた成果である。

北房の魅力はホタルと自然（アンケート結果より）

北房の自慢できるものは？住民アンケートの結果、上位3つは以下のとおりであった。

- | | | |
|-----|---|-----------------|
| 一般 | … | 1位：ホタル(16 票) |
| | | 2位：自然が豊か(13 票) |
| | | 3位：農産物(11 票) |
| 中学生 | … | 1位：自然が豊か(21 票) |
| | | 2位：人が優しい(17 票)、 |
| | | 3位：ホタル(12 票) |

さまざま回答があった中、ホタルと自然をあげる回答が非常に多かった。ホタルが舞う環境に住んでいること、それを育む自然に魅力を感じていることが分かる。



ホタルの研究を進めて新たな成果を

一方、そういう状態にありながら、ホタルの生態や生息環境については分かっていないことも多く、調査や分析など研究分野の活動はまだこれからという状況である。それは、今後まだ取り組むべきことが多く残されているということであり、生態研究や自然環境の分析などを進めることによって、全国から認知される「ホタル研究の聖地」になり得る可能性もある。こうした活動が今後のさらなる展開につながることも視野に入れ、他地域や大学、研究機関等との連携を含めた幅広い活動にも取り組んでいく必要もある。

○具体的な取組

ホタルを守る活動については、北房ホタル保存会が中心となって取り組んでおり、その活動は50年を超える。今後、保護活動を継続していくためには、関わる人の確保や人材育成が大きなテーマとなる。また、北房の人々がホタルを自慢としている一方で、ホタルについての知識や価値を十分に理解されているかといえばそうでもない。例えば、ゲンジボタルやヘイケボタル、ヒメボタル以外にもオバボタルが生息していること、特に、北房ほたる公園一帯にはこれら4種のホタルが集中

して生息しているという希少な環境については、ほぼ認識されていないのが現状である。こうした希少性や価値、保存活動自体をまだまだ知ってもらう必要がある。そのためには、活動の充実や行政の支援、情報発信をしていくことが必要であろう。

ホタル保護活動の推進

▶ヘイケボタルの再生

ヘイケボタルは北房ほたる公園内など一部で生息が確認されているが、北房全域では減少している。現在、北房ホタル保存会が公園内の水路の整備などを行い、ヘイケボタルの生息環境の保全をしているところであるが、こうした活動を維持継続できるよう支援・協力していく。

ヘイケボタルの生息エリアを
観察する保存会会員



▶河川環境の整備

清掃活動の実施や計画的な浚渫(しゅんせつ)など、ホタルがすむ水辺の環境整備について、地域と行政が一体となって取り組んでいく。

生態研究と発信

▶ホタルの生態研究

ホタルについては種類を問わずその生態について不明な点が多い。備中川の水質やその他の自然環境(気温や水温、湿度など)について継続的に調査・研究を行う。

▶研究成果等の発信

行政や観光団体などは、それらの生態研究などの成果を積極的に発信する。また、他地域や大学などの研究機関との連携に取り組み、研究の深まりや広がり、人材育成につなげていく。

▶活動団体の支援

皆部商店会や北房ホタルの文化推進継承の会、ホタルフェス実行委員会など、ホタルを活用した地域活性化や啓発活動を行う団体がある。これらの活動が継続して行えるよう支援をしていく。

(2) ロマンと郷愁の里「西の明日香村づくり」

古墳は 200 基以上、夢と想像が膨らむ地域資源

北房地域には、古墳が 200 基以上確認されている。国指定史跡である「大谷・定古墳群」をはじめ、観光マップ等に掲載されているものもあり、古墳を目当てに北房を訪れる歴史ファンもいる。古墳から貴重な副葬品が出土し注目を集めたこともあり、「埋葬されているのは誰か」「当時の北房は要地であったのではないか」という夢が膨らむ議論が尽きない歴史ロマンの地である。一方、古墳だけでなく中世の山城跡や作刀の歴史、ぶり市などの行事風習など、北房には歴史にまつわる資源やエピソードが多く、それらを生かした住民活動が盛んに行われているのも特徴である。

北房の歴史を発信する新たな動き

古墳は、その様式が時代によって異なり、古代の様子を解明する手がかりになるものである。数ある古墳の中でも、上水田にある「荒木山東塚古墳」は真庭市内で最も古い古墳の一つとされ、古墳時代の成立期に築かれたものである。後につくられた西塚古墳とともに、平成 30 年度から真庭市と同志社大学が住民と共同で調査を行っている。その結果、石室の存在や金属反応が得られ、令和 3 年度から市が西塚古墳の発掘調査に向けた準備に取り組むこととなった。発掘調査が行われれば、かつて大谷 1 号墳から双竜環頭大刀が発見されたときのように、全国から注目を集め北房や真庭が発信される可能性も高い。



○具体的な取組

現在動き出している荒木山古墳群の調査、今後進めていく発掘に向けた動きを契機に、古墳をはじめとした歴史文化遺産を取り巻く環境が大きく変わる可能性がある。地域と行政は、こうしたことをチャンスととらえ、文化振興や観光振興などあらゆる面で、この歴史文化遺産を活用する仕組みを作っていくことが重要である。古墳の発掘と保存、周辺環境の整備、文化施設の活用など、資源や施設を生かした活動を展開し、また、それらの個々の取組をつなげていくことで多くの人を巻き込んだ動きにしていく必要がある。

古墳の調査・研究と活用

▶荒木山古墳の発掘調査

市、同志社大学、住民が共同で荒木山古墳群の発掘調査を行う。また、発掘に当たっては、地域住民が主体的に関わり、地域内外から大勢の人が参画することができる仕組みで行い、この取組が広く関心を集め、地域経済へ波及効果をもたらすようにしていく。

▶古墳活用のための組織づくり

歴史文化遺産活用のモデル的な取組とすることを旨とし、発掘成果の後世への伝承や活用を担う民間団体の活動を支援する。

住民活動の支援

▶活動団体の支援

古墳だけでなく城跡や伝統行事、風習など北房の歴史文化遺産を保存・活用する取組を推進する。それぞれの団体の活動が継続できるよう、行政や観光団体はその活動を積極的に発信するほか、行事・イベント等の後方支援をする。

▶周辺環境の整備

行政や観光団体は、統一的な看板の整備や散策マップの制作など、住民活動を後押しするような周辺環境の整備を行っていく。

(3) 子どもも大人も学び続ける「学びの里づくり」

北房で再び教育環境の充実を

北房には江戸時代、「砦部教諭所」があり、地域の人々の教育を支えていた。また、教諭所に縁のある菊池家は、日本人で初めての数学教授である菊池大麓(だいろく)という偉人を輩出し、その子の正士(せいし)も世界的な物理学者であったという。大麓は後に砦部小学校に「菊池賞」を創設し、勉学優秀な児童を表彰するといったこともしており、北房はかつて、環境が整った教育にとっても熱心な「学びの里」であったといえる。

しかしその一方で、こうした背景を含め、前述したホテルや歴史文化遺産のことを地域の人々が詳しく認識していないのも事実である、特に、歴史文化遺産については、北房の自慢を尋ねた住民アンケートでも、「歴史・文化財」と応えたのは一般が7位(6 歳)、中学生が10位(3 歳)と決して高くない。これは、大人も子どももこうしたことへ触れる機会や場所が少ないことが一因ではないかと思われる。

子どもたちへのふるさと教育

▶小中学校での地域学習

北房の自慢であるホタルや古墳をはじめとした郷土の歴史について学び、身につけるため、小学生や中学生が地域のことに触れる機会をつくる。子どもたちの興味・関心を引き出すよう、体験を通じた学習環境を学校と連携して創出する。例えば、子どもたちによるホタル研究の実践、古墳調査への参加などができるよう地域の活動団体と連携して企画・実施していく。

▶課外学習環境の充実

北房図書館や北房ふるさとセンターなどの文化施設を活用し、意欲のある子どもたちの探究心を満たす環境を整える。郷土にまつわる蔵書の充実、展示の定期的な入れ替えなどを行い、夏休みや放課後時間にも繰り返し学び、より深く知ることができる場所づくりを行う。

北房ならではの体験学習

▶いにしえ体験講座

北房ふるさとセンターや北房文化センターなどで、より「むかし」を身近に感じ興味をかき立てるような体験講座を実施する。また、ふるさとセンターでは、こうした講座を通じて住民が参画しながら展示を充実し、施設の魅力アップも同時に図っていく。

北房ふるさとセンターでの火起こし体験



▶自然に触れる環境学習

ホタルのすむ自然や川、里山の資源について学ぶ環境学習として、ホタルや星空の観察会、川に入って生き物を調べる体験イベントを実施する。また、河川清掃やウォーキングイベントなどを通じ、こうした自然を守る意識を啓発する。

(4) 誰もが住み続けたい「人を受け入れる里づくり」

住民アンケートや策定委員会では、「人」に関する意見も多くあがった。アンケートでは、北房の良さとして「人が優しい（仲が良い、寛大である等）」が、一般では4位、中学生では2位とともに上位であり、北房の"人柄"について自らが好印象を持っている様子がうかがえた。一方、自由記述では、「人を増やしてほしい」「子どもが少ない」といった"人口"に対して危機感を訴える意見も多かった。

策定委員会では、こうした結果も踏まえてグループワークや意見交換を何度も行い、重点テーマの設定を行ったが、その中で「移住者を受け入れるためには」や「人口を増やそう」「空き家を活用していこう」といった移住・定住に対して積極的な声が多かった。

これらのことから、北房の「人」も資源であり、それを生かした住みよい環境づくりも、これからの北房の発展を支える大きな要素と考えられる。

○具体的な取組

北房は、古くは大和や吉備、出雲の国に通じる交通の要衝であり、後には備中松山藩から伊勢亀山藩の所領となったことなどから、人や文化が移入する歴史をたどってきた。それは現代の人柄や風土にも残っているように思われ、北房の特質の一つであるといえる。人口減少が進む中ではあるが、北房は主要道や高速道路が通じており、農山村の良さを残しながらも県南の都市や関西圏からのアクセスに優れている。また、岡山自動車道の4車線化が現実となり、さらに環境が向上しようとしている。北房は人が行き交い、文化が交流する場所であるのは今も変わらない。

交通の利便性はストロー現象を引き起こす恐れもあるが、北房の住環境を積極的にPRすれば、誰もが住み続けたい、そして移住したいまちにすることができる。そのために、地域情報の収集と発信、移住者への支援、住民同士の交流推進を行うことが必要である。

移住・定住情報の発信

▶北房の移住情報の発信

北房の利便性、子育て・教育環境、先輩移住者の活躍などを発信し、移住希望者が情報をキャッチして気軽にアプローチできる環境を整える。そのためのポータルサイトとなる情報発信ツール（ホームページ、SNS）を開設する。

空き家・空き農地の活用

▶空き家等の活用

北房へ移住するための住まい、なりわい探しをサポートするために、空き家や空き農地の現状を把握し、共有する。また、真庭市空き家情報バンクといった制度を効果的に活用できるよう住民や団体に積極的に呼びかけていく。

北房は住み続けたいまち（アンケート結果より）

住民アンケートによると、北房の良さとして「人が優しい（仲が良い、寛大である等）」が、一般が4位、中学生が2位と上位であった。北房に住んでいる人自身が地域の人々に対して好印象を持っていることがうかがえる。また、子や孫に北房に住み続けてほしいかという質問では、「思う」が47.8％、「どちらでもない」が18.9％、「思わない」が33.3％であった。

第6章 地域間の連携と交流

(1) 個々が連動し「地域・人を動かすまちづくり」

4つの主要テーマは、それぞれの分野で動く団体やプレーヤーが存在し、長年にわたって進められてきた取組も多い。しかしながら、これらを今後地域全体で進めていくためには、それぞれを連動させることが重要である。そして、そのために行政はもちろん北房観光協会といった、北房の地域づくりや観光産業に関わる組織が中心的な役割を担い、個々の取組がつながる事業や域外と交流する広域的な取組、それらを推進していくための仕組みが必要である。

そして、全体が大きな推進力となって地域経済の発展につながるように以下の取組を行う。

地域資源を生かす

▶域外との交流

都市と農村、里山と里海など、あらゆる視点・目的で域外と交流する。ホタル保護や古墳の発掘調査など地域資源を生かした活動に域外の人々が参画できる仕組み、また逆に里海など他の取組に参加する機会などをつくり、交流人口と関係人口の増加を図る。

▶周遊環境の整備

北房を訪れた人が、史跡や観光スポットを分かりやすく散策できるよう統一的な案内看板を整備していく。また、散策マップの作成などを地域と行政が一体となって取り組んでいく。

人を呼び込む

▶観光商品づくり

北房にまた来たい、北房に長く滞在したいと思ってもらえるような滞在型の体験メニューの開発と実施、また、北房の魅力を形にし発信するために、農産物のブランド化や新たな特産品の開発を行う。

▶滞在拠点の整備・充実

北房ふるさとセンターなどの文化施設、北房ほたる公園や四季彩湖一帯の自然体験エリアなど既存スポットの魅力をつなぎ、最大限に生かしていく。また、施設・スポット間のつながり、さらにはそれを域外との交流につなげていく拠点施設を整備する。



四季彩湖一帯の風景

みんなが活躍する

▶観光・歴史のガイド育成

ひとりひとりが地域の魅力を語り発信できるよう、北房を訪れた人に対して分かりやすくガイドができる人材を育成する。

古墳など史跡のガイドをする観光協会スタッフ



▶暮らしの案内人

移住希望者への情報提供や移住者の暮らしをサポートするために、行政と地域団体が連携し、北房の暮らしの魅力を発信・紹介する人材を育成する。

人がつながる

▶地域と都市住民の交流

移住者を受け入れ、魅力ある田舎としてありつづけるため、真庭なりわい塾の実施などを通じ都市住民との交流に積極的に取り組んでいく。

▶移住者間・住民同士の交流

北房の全ての人々が安心して協力して暮らしていくことができるよう、移住者間のネットワークづくりやコスモス植栽、イルミネーションなどの住民間のコミュニティ活動を推進・支援する。



(2) 北房地域振興計画を動かす推進体制

北房地域振興計画の4つの主要テーマは、例えるなら4つの車輪である。また、これらを連動させる「地域・人を動かすまちづくり」はそのエンジンとなる役割を持つ。そして、この計画を動かしていくためには計画全体の「操縦者」が必要となる。

最後に、北房地域に住む人々が力を合わせ、同じ方向を向いてハンドルを動かす体制づくりについて延べ、計画のまとめとする。

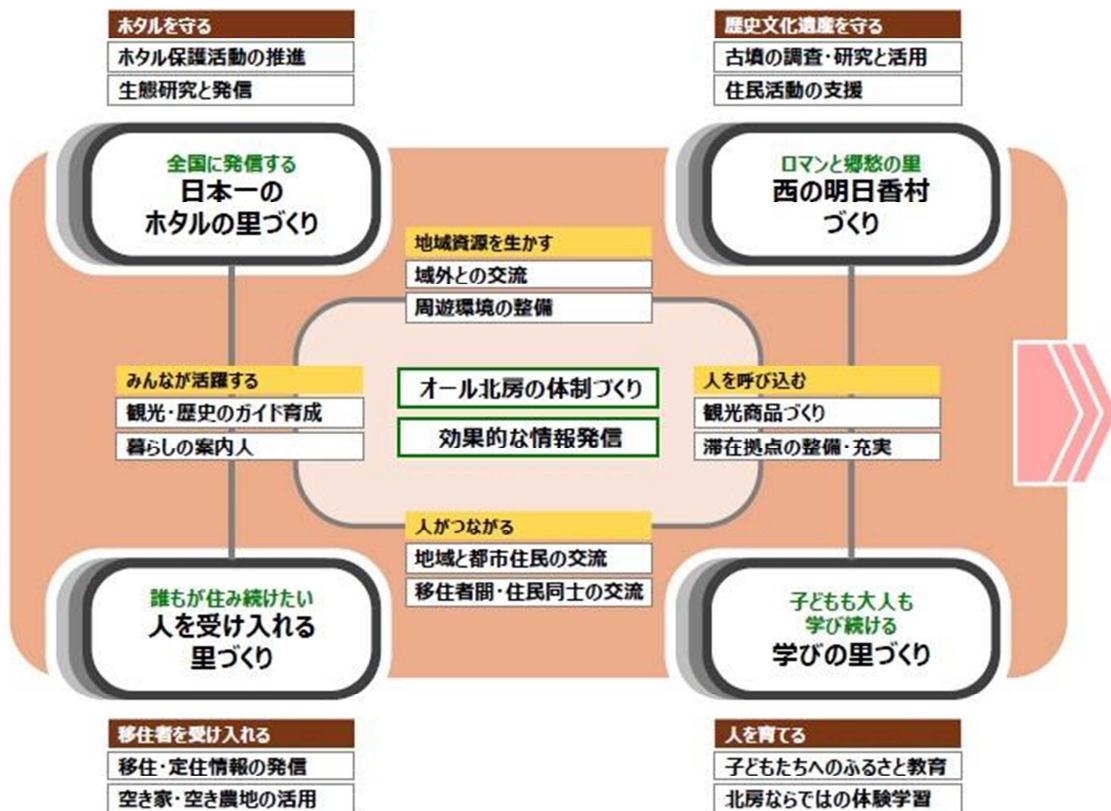
▶オール北房の体制づくり

この北房地域振興計画を地域が一体となって推進していくために、役割分担をしながら住民と行政が協力して取り組んでいく体制を整える。その体制づくりのために、北房のまちづくりについて意見を出し合い、語り合うことができる場を定期的に設ける。

▶効果的な情報発信

地域の内にも外にも情報が行き届き、北房の動きをみんなが共有できるよう、積極的な情報発信を行っていく。

[推進体制がハンドルとなり計画を動かしていくイメージ図]



【資料編】

北房地域振興計画策定委員会規約

(目的及び名称)

第1条 真庭市北房地域の将来を展望し、持続可能なまちづくりと特色ある地域づくりを推進していくために北房地域振興計画を策定することを目的とし、このために北房地域振興計画策定委員会（以下、「委員会」という。）を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、次の団体等に関係するものをもって構成する。

- (1) 北房地域の地域づくり団体
- (2) 北房地域の農商工事業者
- (3) 北房地域の観光事業者
- (4) 北房地域の文化振興団体
- (5) 真庭市

(所掌事務)

第3条 委員会は、次に掲げる事項を協議決定する。

- (1) 北房地域振興計画の内容の検討に関する事
- (2) その他北房地域振興計画策定に必要な協議に関する事

(役員)

第4条 委員会に次の役員を置く。

- (1) 委員長 1人
- (2) 副委員長 1人

(役員を選任及び職務)

第5条 委員長、副委員長は委員会を構成する団体の委員の中から互選する。

2 委員長は会務を統括し、委員会を代表する。

3 副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故あるときはその職務を代理する。

(任期)

第6条 役員任期は、令和3年3月31日までとする。

(アドバイザー)

第7条 委員会にはアドバイザーを置き、助言を求めることができる。

(会議)

第8条 委員会の会議は、委員長が必要に応じて招集し、会議の議長となる。

2 委員会は、委員の2分の1以上の出席をもって開くことができる。

(事務局)

第9条 委員会の事務局は真庭市北房振興局地域振興課に置く。

2 事業の実施の必要に応じて、構成団体がその事務を分担する。

3 事務の分担等の詳細については、都度協議し、決定する。

(その他)

第10条 この規約に定めるもののほか、必要な事項は、委員長が別に定めるものとする。

附則

- 1 この規約は、令和2年8月5日から施行する。